

2019年度川口賞報告書

報告者：松尾 正樹（大阪大学理学研究科生物科学専攻）

参加国際会議：10th International Tunicate Meeting (ITM)

開催地：Villefranche-sur-Mer, France

日程：2019年7月7日－12日

発表数：口頭発表 58 件、ポスター発表 65 件

参加報告

ITM は尾索動物(ホヤやオタマボヤ等)の研究を対象とした国際会議であり、19カ国から160名を超える参加者があった。本会議は、環境、神経、性分化、再生、発生、進化、遺伝子制御など、参加者の研究領域が非常に多岐にわたることも特徴である。会場近くには臨海実験所があり、ここでは古くからホヤの研究が盛んに行われてきた。私は大会の前日に実験所を見学する機会を得た。珍しいホヤや飼育施設を見学したり、研究所で行われているホヤの初期卵割に関する研究について口頭議論したりと、非常に有意義な訪問となった。

大会本番において私は3日目に15分間の口頭発表および質疑応答を行った。発表主旨は「オタマボヤでは脱リン酸化酵素 PP2A が減数分裂停止の維持に必要である」というもので、質疑応答では「(低 pH が卵巣内環境を再現しているという仮説に対して) 低 pH 海水で処理し続けると卵の寿命が延びるのか」という私には発想のなかった実験の提案など、計4つほどの質疑をいただき、新しい知見を得られた。発表後の休憩時間には何人かの方から「面白い発表だったよ」とお声がけいただき、インパクトのある発表をできた手応えを感じた。またポスター発表では他の方々の研究を見て回った。その中で特に興味深かったのは、オタマボヤ卵への顕微注入を手法として用いた研究である。この手法は、卵が小さすぎるため操作技術的に困難とされており、当研究室でも導入できていない。成功させるための実験機材やコツなどを詳細に伺うことができた。

大会中日には、世界中のオタマボヤを扱う研究者たちの懇親会に参加した。論文でしか知らなかった著名な研究者の方たちと親睦を深め、オタマボヤの研究や飼育に関する意見交換を行った。総じて、脊索動物の研究および、オタマボヤのモデル生物としての発展を期待できる、実りの多い国際会議となった。